

〔一話一言四十五〕仙臺釘子村百姓仇を被討に参り候實記

奥州仙臺領岩井郡東山釘子村庄右衛門と申者敵を被討に参り候實記、

文政二年春奥州仙臺領岩井郡東山釘子村の百姓庄右衛門歳六十二歳敵を被討に参り候次第

は、略中 文政二年の春に至り、最早我六拾貳歳になりけるが、先年人殺したる事、朝暮心に絶へず、

妻子にもふかく隠し、口外にも出さず、心中に計思ひて暮し、われ人を殺したるむくひ、終には子

孫にむくふべしと案じ煩ひけるが、當年六拾貳歳に相成候へば、人間の定命も是迄なりとおも

ひあきらめて、子孫之爲に、先年我が手に掛て殺たる子孫の者を尋て、敵を打れ候はゞ、子孫へむ

くひも有まじとおもひ付、略中 旅立ける、然る處信州口坂に掛りて相尋けるは、二十三ヶ年以前、

口坂にて殺されける人の子孫、誰と申人にあるべきやと、道行人に問ける所、彼男答けるは、夫は

我等近村に候由申ける、よつて茲からばおしへ給へとて同道参りける、無程口坂にも相成、同所

百姓彌五郎と申者の所へ罷越ける所、振舞、これある様子にて、男女大勢取込居りける所へ、庄右

衛門申入けるは、私は奥州仙臺東山釘子村庄右衛門と申者に御座候所、御亭主へ御目に掛り、御

相談申度品々候へば、御尋仕候と申ける、略中 庄右衛門洗足致し、直に座敷へ通りけるに、膳最中

にて上座に和尚居、左右相伴の客居流ける所へ、庄右衛門申けるは、私儀は奥州仙臺釘子村庄右

衛門と申者に御座候が、廿三年以前口坂にて、此家の亭主を我が手にかけて殺ける間、御子孫之

御方に討れ申度、はるく尋罷出候間、何も様御取計ひ下されかしと頼入ける、和尚始め皆々驚

入興さめ、まばし無言に扣ける所、和尚答て、亭主彌五郎を呼て申されけるは、楮今日佛彌兵衛を

手にかけて殺けるもの、よしにて、其方に敵を討れ度、遠國より尋來る事に候所、古今稀なるかよ

ふの義は命を助るも、今日佛事追善に相成り候間、たすけ遣すべしと申されければ、彌五郎何れ

御膳も相過し、焼香相勤御答可申上と挨拶有けるに、扱焼香も相勤、和尚并に客人も止り居、彌五